

津波避難キャスターコメントに関する考察 —非報道従事者対象の定量的調査から—

○福本晋悟¹・近藤誠司²

¹株式会社毎日放送 アナウンサー室アナウンス部（人と防災未来センター特別研究調査員）

²関西大学准教授 社会安全学部安全マネジメント学科

1. 本研究の目的

東日本大震災の津波襲来は、多くの場合、大津波警報などの津波の危機を知らせる情報が無いままの“不意打ち”だったのではなく、情報は視聴者・リスナーなどの住民に届いていた。しかし、その情報が住民の適切な避難行動には結びつかず、いわゆる「情報あれど避難せず」という状況が生まれていた。これを近藤ら（2012）は、「情報のリアリティがなかった」と解釈している。

一方で、テレビやラジオなどの放送系メディアの避難呼びかけによって避難を決意した住民もいたことをふまえると、地震発生から津波襲来までの猶予時間内に避難を“後押し”する情報のリアリティを高めれば、より多くの人を救う可能性につながるのではないかと考えることもできる。このような論脈の中で、各放送局内では、災害初動特別番組の放送手法や放送実施マニュアルの検討・改善を進めてきた。それらの1つで、ニュースキャスターが使用する「津波避難キャスターコメント（呼びかけ文言、後述する）」も検討・改善が行われた。

ところが、放送業界の実情を見渡してみると、確かに視聴者・リスナーの避難行動を促すための改善作業は行なわれてはいるものの、印象論や経験談を待みにした弥縫策も多く、その効果の検証はなされずにいる。

そこで本研究では、津波避難アナウンスメントの議論の礎となるデータを構築するため、住民を想定した非報道従事者対象の定量的調査を実施した。

2. 本研究のアプローチ

津波避難キャスターコメントとは、ニュースキャスターが視聴者・リスナーに避難などの適切な行動を呼びかけることを目的に、放送局内で検討を重ねられた例文集のことであり、キャスターが放送で避難を呼びかける文言である。放送局内では、それらをまとめた冊子や予定稿を作成して、キャスターなどの出演者が緊急時にすぐに読めるようにスタジオに常置している。その理由の1つは、災害初動特別番組を可能な限り迅速に開始して避難を呼びかけるためであり、キャスターは、気象庁の観測データなどの最新情報とキャスター

コメントを瞬時に織り交ぜ、視聴者・リスナーに対して危険回避の行動を促す。

まず本研究では、東日本大震災以後の津波警報発表時の放送で実際に使用されたキャスターコメントを基本とした独自の「津波避難キャスターコメント」を作成した。これを、東日本大震災後に NHK などが採用している「切迫感のある強い口調」で第一著者が放送局のスタジオで読み上げて録音し、「津波避難サンプル音源」を作成した。読み尺は29秒である。

大津波警報が、岩手県・宮城県・福島県に発表されました。東日本大震災クラスの巨大な津波が来ます。非常事態です。今すぐ逃げてください。今避難すべき場所は、高台や津波避難ビル、津波避難タワーなど高いところですよ。急いで逃げるよ！ただちに避難！命を守るために、ためらわずに避難をしてください。この放送を聞いたあなたが、まわりにも声をかけながら率先して避難をしてください。

調査で使用する質問紙の質問項目は、津波避難キャスターコメントを下線ごとに10パーツに分解して各設問とし、それぞれの評価（良し悪し）を五件法で尋ねた。

3. 調査概要と結果

(1) 対象と方法

非報道従事者の代表サンプルとして、関西大学社会安全学部で「災害ジャーナリズム論」を受講する大学生を対象とした。調査は、2018年度（n=284）と2019年度（n=228）の2年度続けて同じ内容で行なうことで傾向を確かめることにした。なお、共に約88%が大学2年次生であった。調査実施場所は、講義が行なわれる大型ホール教室である。

サンプル音源を再生する前に、定型のインストラクション（「これから大津波警報が発表された時を想定したアナウンスメントを流します。30秒ほどのかたまりで、2度同じアナウンスメントが流れます。よくお聞きください」と伝えた後、音源を場内スピーカで放送した。

(2) 結果

集計を数値化するにあたり、5段階評価の最高評価を「5点」、最低評価を「1点」として換算した。

まず全般的な傾向として、両年度調査のいずれの設問（キャスターコメント）も「5点」と「4点」で65%以上を占めていることから、低評価のものはなかった。

a) 最高評価（5点）の占める割合での分析

特に評価が高かったのは「今すぐ逃げてください」という至極シンプルなキャスターコメントで、「5点」の割合が他のコメントと比べて突出している（表-1）。

「非常事態です」や「命を守るために」といった東日本大震災以後に登場した新しいタイプのコメントの順位は、両年度ともに中位であった。また、「県名」や「大津波警報」は、両年度ともに下位となった。

表-1 「5点」の回答割合の順位（年度比較）

2018年度調査		2019年度調査	
1位	今すぐ逃げてください 45%	1位	今すぐ逃げてください 53%
2位	東日本大震災クラスの～ 36%	2位	東日本大震災クラスの～ 41%
3位	ためらわずに 29%	3位	今避難すべき場所は～ 32%
4位	非常事態です 28%	4位	ためらわずに 31%
5位	今避難すべき場所は～ 27%	5位	非常事態です 30%
6位	「体言止め」 27%	6位	「体言止め」 24%
7位	命を守るために 25%	7位	命を守るために 24%
8位	この放送を聴いたあなたが～ 23%	8位	この放送を聴いたあなたが～ 24%
9位	大津波警報 18%	9位	大津波警報 19%
10位	「県名」 16%	10位	「県名」 17%
			-

b) 標準偏差を考慮した分析

「東日本大震災クラスの巨大な津波が来ます」という文言の「5点」の割合は、両年度とも2位と高い評価ではある。しかし一方で、標準偏差の値が2018年度は0.93と3番目に高く、また2019年度では0.92と2番目に高いため、非報道従事者にとって受け止め方に幅のあるキャスターコメントである可能性がある。

また、すでにNHKなどで採用されている「体言止め」（急いで逃げること！ただちに避難！）の評価は、中位かつ2018年度の標準偏差は0.98で最も高く、2019年度は0.90と2番目に高いため、賛否が分かれたといえる。

4. 考察

「今すぐ逃げてください」という簡明な一何のひねりもなく新規性もないフレーズが、突出して高評価となった点が示唆的である。原点に立ち帰って考えてみると、最も伝えるべき内容は、「逃げる」という行動を促す愚直なメッセージに他ならない。むやみに言葉遣いを変えても改善につながるとは限らないことは、実践的には極めて重要な知見のひとつであるといえよう。また、例えば災害初動特別番組時で、新たな情報がスタジオに届かない時やキャスターが言葉に詰まった際には、このキャス

ターコメントを繰り返すことが有効かもしれない。

次に、東日本大震災以後に登場した新たなコメントの賛否は分かれた。まず、「東日本大震災クラスの巨大な津波が来ます」は、両年度ともに2位で高評価といえよう。ただ、標準偏差が高いことから、このコメントは謙抑的に使用することを推奨すべきかもしれない。「マス mass」に向けてメッセージを発信する以上は、受け止め方にばらつきがあることを自覚しておく必要がある。一方で、切迫感を高めるために導入された「体言止め」の評価は中位かつ標準偏差が高いことから、その効果には疑問が残る結果となった。

ところで、「大津波警報」という言葉は、危険度が高いことを端的に示す最も流布している言葉のひとつではあるが、関西に居る大学生にとってみればおそらく発表対象地域となった経験がないため、身近に感じるができないものであった可能性がある。

また、「県名」への評価は2018年度調査では「3点（どちらでもない）」が25%で、「ためらわずに」と並んで最も多かった。同様に2019年度調査では28%と最多であった。これについては、大阪府内の大学に通う学生にとっては居住地ではない東北地方の県名だったことがそのまま影響した可能性もある。

5. 課題と展望

本調査は、大津波警報発表時に用いるキャスターコメントについて、非報道従事者を対象とした定量的調査であり、その結果からは概ね高い評価を受けやすいキャスターコメントが判明した。引き続き年度ごとのデータを蓄積することで、津波避難や津波情報に対する回答傾向の変化を探ることも検討したい。ただし、日頃から防災を学んでいる大学生を対象としているため、災害情報に対する感受性が高いことが結果に偏りを与えてしまっている可能性は排除できない。また、講義内の調査であることや会場がホールであるため、日常の放送受信環境とは異なることも考慮すべきである。

また、防災関心度や情報接触度の違い、世代や地域性の違いなどによっても「津波避難キャスターコメント」の受け止め方は異なるものと考えられる。同時に、サンプル音源自体、内容や形式を多彩に変化させることもできる。今後はさらに横断的・縦断的な調査を展開したい。

謝辞：調査にご協力いただきました関西大学社会安全学部「災害ジャーナリズム論」受講生の皆様にこの場を借りて改めて御礼申し上げます。

参考文献

近藤誠司・矢守克也・奥村与志弘・李勇昕（2012）東日本大震災の津波来襲時における社会的ナリアリティの構築過程に関する一考察～NHKの緊急報道を題材とした内容分析～、災害情報, 10, 77-90.